ISSN 0915−6925

大学アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2000. 3. 27 No.22

Eastern Japan Section, The Japanese Association of College and University Archives

1999年9月20日(月) 全国大学史資料協議会 1999年度全国研究会講演

『金沢大学50年史』の編纂について

金沢大学教育学部教授 江 森 一 郎

ようこそ金沢大学へ

金沢大学では大学史の編纂は、開学10周年を記念して作成された『金沢大学十年史』（昭和35年刊行）があります。大変薄いものですが、しかし、内容的には戦後の新制大学設立の交渉経緯などが実証的に記されています。その後、他大学のような「30年史」などの編纂は、全く行われませんでした。複数学部の改組・改革や移転問題が連続してあり、その余裕がなかったのではないかと、私は思っております。

しかし各学部段階では、旧制医科大学の歴史を受け継ぐ医学部の『金沢大学医学部百年史』（昭和47年刊行）や、旧制高等工業学校の歴史を有する工学部の『金沢大学工学部五十年史』（昭和45年刊行）などの刊行が、もちろんあります。教室史や学科史も沢山ありました。しかし、大学全体としての本格的な大学史編纂は、今度の「金沢大学50年史」が初めてです。

ここで金沢大学について若干紹介させておいていただきます。新制大学として昭和24年に発足した事は、他の地域の国立大学とあまり変わりませんが、金沢では、明治時代から「北陸帝国大学」を創設する運動が何回かあり、戦後期も初期にその動きを支持するかのような文部省の対応もありました。また、浄土真宗の信仰の厚い地域でしたので、戦後改革の一時期は、金沢に宗教大学を設ける動きもありました。敗戦直前に設けられた金沢高等師範学校もありました。この関係で、金沢大学教育学部には、附属高校もあります。

創立以後の金沢大学のメインキャンパスは、長い間金沢城内で、最近の総合移転でこの角間の地に移転する迄は、「お城の中の大学」として有名でした。私が平成2年に転任してきた時は、まだ城内キャンパスの時代で、教室から城壁が見え、何か江戸時代にいるような錯覚をした事がありました。ともあれ現在は、総合移転のⅡ期工事が進んでおり、工学部等が移転してくる土地の整地が大規模に進められております。角間に移転しない医学部附属病院は、バリアフリー病院を目指し、現在の所在地で建て替えが進行中です。

『金沢大学50年史』の編纂についてですが、全国大学史資料協議会会員の皆様方からいただいた貴重なご助言や、『東京大学百年史』や『名古屋大学五十年史』、『東洋大学百年史』などの先例となる他大学の大学史編纂を参考としました。なお、編纂委員会の組織方法などは、初期には名古屋大学史編纂室に特にお世話になりました。

さて、平成8年5月には、学長を筆頭に各部局長などから構成される創立50周年記念事

江森一郎先生の講演

業委員会が組織され、その委員会において50周年記念事業の一つに「金沢大学50年史」の編纂刊行が決定されます。国立大学を取り巻く状況が厳しい中で、50年史編纂に従事する専任スタッフ（講師１名と助手１名の計２名）や臨時職員を有する「50年史編纂室」を何とか立ち上げることになります。専任スタッフの人選にも相当苦労いたしました。しかし、もっとも印象に焼き付いているのは、全２巻を３年間で完成させるという約束です。私はそれではとても出来ないと言い張りましたが、種々の事情でその場では納得した形をとらざるをえなくなり、今になっていよいよ実現不可能ではと思っている次第です。

さて、私も委員として加わっている50年史編纂委員会は、橋本哲哉委員長（附属図書館長、経済学部）を中心に平成８年７月に組織され、以後50年史編纂のそのものの問題を中心に検討していきます。「金沢大学50年史」は部局編１巻と通史編１巻の計２巻の構成です。平成11年６月に刊行された『金沢大学50年史』部局編は、大部なもので1200ページ以上あります。この資料協議会の皆様方の図書館などにも、寄贈されるものと思います。50年史の取り扱い・配付方などは、金沢大学事務局の庶務課で行っています。ご照会などは本学庶務課（ＴＥＬ076－264－5010）までお願いします。なお、写真集も編集・出版しています。

50年史編纂の基本的な考え方としては、以下の点などを特色としました。第四高等学校・金沢医科大学などの前身校の歴史を十分取り上げ、北陸・環日本海地域とのつながりも考慮する。写真やコラムなどを挿入しビジュアルな構成で読みやすい50年史を編纂することなどです。

50年史編纂委員会において、まず50年史の部局編を通史編よりも先行させて編集し、平成11年５月末の創立50周年記念行事に合わせて、刊行する事にします。50年史編纂室が、事務局内に平成８年12月に開設してから、部局編刊行まで約2.5年経過しています。部局編が、大幅に計画から遅れる事がなかったのは、各部局のご努力と橋本委員長の巧みな采配と熱意、事務局を含めた50年史編纂室スタッフの尽力の賜物と信じます。

それまでの主な経過を述べます。平成８年10月の50年史編纂委員会では、部局編の各部局割当てページ数（案）が提示されます。部局編の執筆姿勢は、基本的には各部局の自治にお任せしましたが、やはり「金沢大学50年史」としてのある程度の体裁を考えれば、いろいろ編纂室側で調整しなければなりませんでした。平成10年に入ってからは、草稿がある程度まとまった部局から順次編纂室に提出してもらいました。提出された草稿を、橋本委員長以下、私も含めた編纂室スタッフ５～６名で、手分けして速やかに読んで参考意見をつけて、各部局に返却しました。このようなやり取りを、２～３度繰り返しました。各部局も、大変だったと思いますが、私にとっても大変疲れる作業でした。草稿の提出が滞りがちな部局に対しては、橋本委員長と編纂室スタッフが夜討ち朝駆け？を決行して、なんとか平成10年の秋口頃には印刷会社に原稿を順次入稿できました。

ともかく、印刷所の校正担当責任者（藤田さん）が、とてもバイタリティーと緻密さと責任感に溢れる女性で、彼女の仕事ぶりや督促によって部局編はなんとか刊行することができたと、私は思います。（しかし、彼女の名前は部局編のどこにも出しておりません。）

現在編纂途上にある「金沢大学50年史」通史編についても、少しお話します。50年史の編纂を実際に推進するにあたって、まず、私を含めて学内の歴史関係の先生方を数名集めまして、編纂室スタッフを形成しました。この編纂室スタッフが、通史編だけでなく部局編を含めて「金沢大学50年史」全体に関する、現実的な調整役（部局編の校正確認や、通史編の執筆・総括責任）をつとめています。よ

くどこの大学でも、大学史の編纂に学内の歴史研究の先生方を動員しますが、やはり“人選”はきわめて慎重に行うことが望ましいと思います。しかし、その編纂室スタッフのなかでも中心的な人物の一人であった林宥一委員（経済学部）がこの８月に急逝されたのは、まことに残念な事であり、大きな痛手となっております。

なお、編纂室スタッフで、大体毎月１回程度「編集会議」を行っています。その編集会議の中で、通史編の目次案や執筆者の配置などを、色々と検討しました。すでに平成10年９月には、通史編の目次案や執筆者の配置などを、色々と検討しました。すでに平成10年９月には、通史編の全体執筆者会議を行っています。私は、正確な執筆者の人数は把握していませんが、通史編だけでも30名を優に超えると思います。編纂室スタッフが、通史編の各章の総括責任者となって、各章の分担執筆者らと今後逐次必要に応じて打ち合わせ・検討していくことになります。私の場合は、四高をはじめとした前身校や、戦後の金沢大学設立までの経緯など、助手の谷本室員とともに３章ほどの責任者になっています。準備が良い方の草稿がはやばやと提出されはじめています。

別の面から通史編の事をもう少し話しますと、私と編纂室員（谷本氏）で、先に挙げた３章を総括責任していますが、執筆者の配置とともに、けっして十分とはいえませんが、資料調査や聞き取り調査なども行っています。（ちなみに、谷本氏は自動車免許がないので、私がいつも運転手です。）その成果の一部は『金沢大学50年史編纂　ニューズ・レター』の各号などを、ご参照いただければ幸いです。まず、市内在住の四高の卒業者の方々から当時のお話などを伺い、学内外に点在する四高の資料調査を行い、金沢大学50年史編纂室編『第四高等学校関係資料リスト』（平成11年２月）として刊行しました。これは、谷本氏が中心になり、院生などを使って作成し、関係者から寄付もいただくという意味もありました。また、石川師範学校や金沢高等師範学校など前身校に関する学内資料については、谷本氏と私で「金沢大学事務局所管の金沢高等師範学校・第四高等学校・石川師範学校関係資料」『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第48号（平成11年２月）として刊行しています。これについては、私自身が開設していますインターネットのホームページにも、テキストファイルの形で掲載しています。
(http://kaidou.ed.kanazawa-u.ac.jp/bulletin.html)

なお、前身校の資料調査に加えて、やはり戦後教育改革期の資料調査が、骨の折れる作業でした。私としては正直にいえば、この資料調査はけっしては十分なものではないと思います。もちろん、限られた予算と人手と期間内で、最低限の事はしました。GHQ関係資料につきましても、金沢大学に関するCI&E文書やCAS文書など、重要な資料をなんとか最低限抽出する事だけは出来ました。その際には、立命館大学のインターネット上のデータベースや名古屋大学所蔵の資料が役に立ちました。

戦後教育改革期に関する政策的な研究は、個別大学史編纂だけでは、十分に行う余裕は残念ながらありません。ただし、金大の場合は「金沢大学創設資料」（４巻と別冊１巻）というものが大切に保管されていましたので、それらの資料と、先のGHQ資料や国立教育研究所に保管されている大学設置委員会資料などを照合すれば、新制大学設立にいたる具体的な経緯は明らかにすることが可能だと思います。また近年、佐藤秀夫氏らが編集している『教育刷新委員会教育刷新審議会　会議録』（岩波書店）は、非常に参考になるものと思います。この中に、金大に関して興味深いことが出てきます。先にも少し触れましたが、戦後新制大学として金大が設立される以前に、政策者サイドで旧制の国内の７つの帝国大学と北陸・中国・四国地域の３つの総合大学の計10大学のみを官立として、その他はすべて官立以外とするという構想があり、それに対して他の関係者がはげしく抵抗した経緯がありました。

以上、どこの大学史編纂でも同じ様でとりとめのない話が中心でしたが、以上がこれまでの「金沢大学50年史」編纂に係わる概要です。

なお、この講演の原稿は金沢大学50年史編纂室谷本宗生氏の草稿を、私が若干加筆・修正しました。

1999年9月21日㈫　全国大学史資料協議会　1999年度全国研究会報告

金沢大学附属図書館の貴重資料について
―― 石川県教育史関連資料を中心に

金沢大学附属図書館図書館専門員　梶　井　重　明

はじめに

以下は、金沢大学附属図書館の貴重資料についてスライドショー・ソフトを使ってお話しした内容の要旨です。映像を主体にお話ししましたので、文章だけでは味気ないものになりますが、ご容赦ください。

当館の資料所蔵の歴史は、当然ですが金沢大学の歴史と深く関わっております。文学部、法学部、経済学部、理学部の前身校である第四高等学校および金沢高等師範学校。教育学部の前身校は石川師範学校。医学部、薬学部の前身校は、金沢医科大学。工学部の前身校は金沢工業専門学校です。これらの前身校の蔵書はほぼ完全な形で当館の蔵書を形成しております。前身校のうち第四高等学校、石川師範学校、金沢医科大学はその淵源を加賀藩の藩立諸学校まで遡ることができます。以下幕末・明治期の石川県教育史との関連を意識しながら、当館所蔵資料について紹介いたします。

明倫堂に関する書物と資料

加賀藩の藩校明倫堂（文学校）と経武館（武学校）が開校したのは、寛政4（1792）年です。開校にあわせて両校に掲げられた巨大な扁額が現在金沢大学資料館に展示されています。これらは戦前まで石川師範学校の講堂に掲げられていたもので、金沢大学がそれを受け継ぎ現在に至っているものです。また明倫堂の出版物として、「四書朱子本義匯参」

報告する梶井重明氏

（43巻清王步青撰　王士鼇編　天保7（1836）年刊　42冊）、「監本四書」（宋朱熹撰　明倫堂訓点　天保15（1844）年刊10冊）、「欽定四経」（［嘉永4（1851）年］刊　100冊）があります。これら3点には明倫堂出版をあらわす「加賀国学蔵版」の朱印が扉の裏に押印されています。

「四書朱子本義匯参」は明倫堂で出席のよかった生徒に与えられたものです。明倫堂では3年間8割以上出席した者には論語匯参一部を、その後3年間怠らなかった者には、孟子匯参、更に3年間、精励した者には、大学匯参・中庸匯参を与えました。全期9年間で全巻揃う褒賞のしくみになっていました。「監本四書」は中国の国士監校刊本の朱熹撰「四書章句集注」を明倫堂で校訂翻刻したもので、朱子学を奉ずる明倫堂で教科書として使われました。

「欽定四経」（御纂周易折中22巻首1巻、欽定書経伝説彙纂21巻首2巻、欽定詩経伝説彙纂21巻首2巻、欽定春秋伝説彙纂38巻首2巻）

は徳川幕府の命令によって出版したものです。天保13（1842）年に、幕府は十万石以上の大藩に大部の漢籍を翻刻するよう次ぎのように命じました。「一体、大身之輩は心掛次第、大部之書一、二部宛も蔵板致し、普く後来にも相伝候様有之度事に候。この段十万石以上之面々へ無洩急度可被相達候」。加賀藩では「欽定四経」と「文献通考」正続とを刊行する計画を立て、まず前者から着手しました。弘化元（1844）年３月そのために藩儒大島桃年が欽定四経校正御用頭取を命ぜられました。ただちに校正を始め、嘉永２年末にその作業を完了し、翌３年10月には刊刻を終ったようです。同４年６月には幕府への献上本２部を製本しました。

成瀬正居（マサスエ）日記と修復

幕末から明治にいたる動乱の時代を生きた金沢人、成瀬正居（マサスエ）（1828-1902）の日記です。横帳仕立ての和装本42冊（そのうち第一冊目だけは縦長の小本）、洋装の懐中日記15冊。合計57冊。虫損が激しく長い間利用出来ない状態でしたが、平成８年度より３ヵ年計画で修復作業が行われ、この程修復が完了しました。修復過程をビデオに記録しました。会場ではこれをお見せしました。

日記は、藩校明倫堂へ通う15歳の少年の日の記録から始まります。毎日の天候や友人、親類縁者との交際、先生の授業の様子など、時刻を記入して克明に綴られています。幕末・維新期の日記は、彼が加賀藩の中枢に関わる要職を歴任した時期であり、精彩をはなっています。加賀藩史研究の第一級の史料として今後の研究が待たれます。また金沢城下で起きた様々な事件も記録されています。さらに加賀藩洋学校壮猶館の長官にあたる壮猶館主附を勤め、明治６年より現在の教育委員会にあたる学務課に勤務したこともあり、草創期の石川県教育史の史料としても貴重です。また、役職に伴い在住した、小松や富山県の魚津や泊、幕末に往還した京都、大坂、江戸などへの、旅行記の部分を含んでいます。晩年の日記には、白山比咩神社の神官としての生活が細かに記録されています。

加賀藩の洋式武学校壮猶館（そうゆうかん）

藩士大橋作之進が自宅内で始めた西洋流砲術の研究所が藩に移管され、嘉永６（1853）年金沢上柿木畠に西洋流火術方役所が設置されました。翌安政元（1854）年７月建物が新築され壮猶館と命名されました。この壮猶館が加賀藩洋式学校の出発点となりました。壮猶館の蔵書には「壮猶館文庫」という蔵書印が押されています。その蔵書は明治維新以後、藩立から県立の諸学校に継承され、やがて第四高等学校、石川師範学校、金沢医科大学の三つの大きな流れをたどり、現在の金沢大学に継承されています。

「壮猶館文庫」の蔵書印をもつ図書のうち特に貴重とされているのはドドネウスの「草木誌」（Herbarius oft cruydboeck／Rembertus Dodonaeus. Antwepen, 1644）です。この図書は５代藩主前田綱紀（1643-1724）が長崎のオランダ商館を通じて購入したものです。延宝８（1682）年に注文されたと推測され、天和２（1682）年11月に金沢に到着したのが記録されています。さらに蔵書印などによって継承のあとをたどると、「金沢藩医学館」の蔵書印があり、石川県甲種医学校の時の墨書の付箋が貼られています。そして「金沢医科大学図書」の蔵書印が押されています。これらによって現在にいたる継承の歴史を知ることができます。

蔵書印で見る学校の変遷と蔵書の継承
― 医学系の場合 ―

明治の初期は藩立学校、県立学校、ときには私立のかたちで多くの学校が興廃しました。やがてこれらの学校の流れは専門、高等教育機関として前述の三つの流れに収束されます。以下医学系の場合を例に蔵書印とそれを採録した図書について簡単に述べておきます。

卯辰山養生所（慶応３（1867）年、貧民の患者のために病院が設立されました。これにより壮猶館の医育機関であった医学局は蘭学生ならびにその教師とも、養生所の中に転入されることとなりました。蔵書印は「養生所医局蔵」（5.2×4.1cm）、採録書は「七新薬」（３巻　司馬凌海著　関寛斎校　文久２(1862)年　和３冊他の蔵書印は「金沢藩医学館」「第四高等中学校医学部図書」）です。

医学館（明治３（1870）年本格的な医学教育機関として発足、それにともない卯辰山養生所は、卯辰山貧病院と改称。養生所内の学生は、すべて医学館に移されました。）の蔵書印は３個あります。ひとつは「医学館」（3.4×2.9cm）です。採録書は「蘭語訳撰」（第２巻［自リ至タ］奥平昌高編・刊　文化７（1810）年　和１冊　他の蔵書印は「壮猶館文庫」）です。他は明治４（1871）年の廃藩置県を挟んで、「金沢藩医学館」（4.7×4.1cm）と「金沢県医学館」（4.7×4cm）の蔵書印があります。

金沢県が石川県と改称された明治５（1872）年、医学館をはじめ旧藩立の諸学校はことごとく廃止されることとなり、６（1873）年４月医学館は病院と改称されることとなりました。私立金沢病院です。蔵書印は「金沢病院」（3.2×3.2cm）、採録書は「牛病新書」（３巻（蘭）布魯巴紐満（プロプア　ニューマン）著　柏原学而訳　明治７（1874）年序刊（英蘭堂）和３冊他の蔵書印は「第四高等中学校医学部図書」）です。

明治９（1876）年８月金沢病院は石川県病院と改称され、県の管理するところとなりました。あわせて病院内に医学所が開設されました。蔵書印は「石川県金沢医学所」（4.3×4.4cm）です。採録書は「日講記聞薬物学」（越児蔑嗹斯［Christian Jacob Ermerins］講述　大阪病院明治６（1873）刊　和20冊他の蔵書印は「第四高等中学校医学部図書」）です。

金沢大学年史資料の展示見学

医学所と病院の経費面における分離がなされたあと、明治12（1879）年１月金沢医学所は、金沢医学校と改称しました。蔵書印は「金沢医学校」（3.6×3.6cm）です。採録書は「外科通術」（３巻　石黒忠悳纂著　明治10（1877）刊　和３冊他の蔵書印は「第四高等中学校医学部図書」）です。

明治17年金沢医学校は甲種医学校（政府の医学教育改革による医学校通則（明治15年５月）にもとづくもので無試験で医師免許が習得できる医学校）の認可を受け石川県甲種医学校と改称しました。蔵書印は「石川県甲種医学校」（3.5×3.5cm）です。採録書は「続続皇朝史略」（７巻　石村貞一纂輯　明治14（1881）年刊　和７冊　他の蔵書印「第四高等中学校医学部図書」）です。石川県甲種医学校は明治20（1887）年４月第四高等中学校の発足とともにその医学部に転換します。

あとがき

大学史、とくに前史の研究調査活動のなかで蔵書の継承の歴史を探ることは重要な仕事だといえます。そして、蔵書印など図書にのこされた記録を調査することは当時の教育の内容にせまるための基礎的な仕事だと考えます。

全国大学史資料協議会
1999年度総会ならびに全国研究会参加報告

中央大学大学史編纂課　松崎　彰
関西学院学院史資料室　池田裕子
東海大学資料室　馬場弘臣
学習院大学史料館　桑尾光太郎
神戸女学院史料室　佐伯裕加恵

1999（平成11）年9月20日(月)から同9月22日(水)にかけて、石川県金沢市角間町の金沢大学角間キャンパスにおいて、「全国大学史資料協議会1999年度総会ならびに全国研究会」を開催した。

9月20日13時30分から14時30分にかけて、金沢大学教育学部棟302号室において役員会を開き、1999年度総会の運営について協議し、事務分担を定めた。また、1999年度の東西両部会の共同事業についても審議し、ケニス・スミス氏講演記録を小冊子の叢書として出版する担当部会を西日本部会として今年度中の出版を目指すこととした。さらに、1999年度の全国研究会の成果を小冊子の叢書として出版する件を決定、出版担当を東日本部会として来年度総会を目途として出版することとし、上記2件について、副会長校（東海大学）が総会に報告し、その承認を受けることを確認した。なお、役員会の出席は、西日本部会幹事校（桃山学院・関西大学・同志社・福岡大学・立命館・龍谷大学・関西学院・神戸女学院）と東日本部会幹事校（神奈川大学・東海大学・慶応義塾・中央大学・武蔵野美術大学・明治大学・学習院大学・実践女子大学・竹市知弘氏・中野実氏）、および会場校金沢大学の谷本宗生氏であった。

役員会終了後、15時から15時30分にかけて同会場において1999年度総会を開催した。はじめに、主催部会の事務局として中央大学の松崎が司会を担当し、総会の開会を宣言し、会長校桃山学院の西口忠氏が開会挨拶をおこなった。続いて、会場校を代表して金沢大学の橋本哲哉氏（50年史編纂委員長・附属図書館長・経済学部教授）が挨拶に立った後、総会議長の選出に移り、明治大学鈴木秀幸氏を議長に、福岡大学藤本俊史氏を副議長に選出した。

総会審議では、役員会の審議結果が東海大学大森悦郎氏より報告されるとともに、1999年度の東西両部会共同事業としてケニス・スミス氏講演記録（西日本部会担当）と本年度全国研究会の成果（東日本部会担当）を小冊子の叢書として出版する件が提案され、満場一致で承認された。なお、ケニス・スミス氏講演記録については、桃山学院西口忠氏より編集経過の説明があった。次に、部会事業計画の報告に移り、東日本部会事務局校補佐（中央大学松崎）・西日本部会事務局校（関西大学福井智佳子氏）から、両部会の1999年度事業計画が報告され、了承された。また、その他の議題として、関西大学福井智佳子氏から、画像保存関係の展示会（日本写真協会）の案内があった後、審議を終了した。

総会に続いて、15時30分から講演会を開催した。講演者は金沢大学江森一郎氏（教育学部教授・50年史編纂委員）にお願いし、「金沢大学50年史の編纂について」という演題で、同大学における編纂事業の経緯と成果・課題等について、まとめていただいた。なかでも、旧制高等学校との関係をめぐるお話は、多く

1999年度総会（9月20日）

の国立大学に共通する論点であったといえる。

講演会終了後、17時30分から、金沢大学生協食堂において研修懇親会を催した。大森悦郎氏（東海大学）による開会の辞と、江森一郎氏（金沢大学）の会場校挨拶の後、竹市知弘氏（東日本部会顧問）の乾杯の発声によって開かれた懇親会では、各会員間の情報交換が活発におこなわれ、終始和やかな雰囲気の中で親睦を深めた。司会進行は松崎（中央大学）、閉会の辞は、東田全義氏（慶應義塾）であった（出席者63名）。

翌9月21日は、10時15分より1999年度全国研究会を開催した。はじめに、金沢大学梶井重明氏（附属図書館専門員・50年史通史執筆者）が「金沢大学附属図書館所蔵の貴重資料について」という演題で報告をおこなった。梶井氏は、スライドショー・ソフトによって原史料を紹介しながら、その来歴や特色、資料的な価値を詳細に解説してくださった。報告終了後、参加者を2グループに分けて、それぞれ梶井重明氏・在田則子氏（金沢大学資料館学芸員）のご案内で金沢大学年史資料展示を見学した。金沢大学草創期の諸資料や前身校の四高関係の資料など、貴重な資料で構成された歴史展示と、同大学附属図書館の収蔵庫などを見学しながら、多方面にわたる参加者の質問に対し、両氏とも終始丁寧に応答してくださった。

続いて、13時30分より分科会を開き、中央大学松崎が発議をおこない、昨年度第2分科会のテーマである「年史資料の収集・保存」を本年度に継続した経緯を説明するとともに、統一テーマにもとづいて3つの課題を設定したねらいと意義を述べて、分科会討議の位置づけをおこなった。分科会全体の記録は、神戸女学院の佐伯裕加恵氏にお願いし、以下の通り各分科会の司会を選出した後、3分科会に分かれて討議を開始した。

第1分科会

「資料の調査・収集をめぐる諸問題」

（307号室）問題提起　鈴木秀幸氏（明治大学）

司会者　池田裕子氏（関西学院）

第2分科会

「資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題」

（308号室）問題提起　福井智佳子氏（関西大学）

司会者　馬場弘臣氏（東海大学）

第3分科会

「組織的な資料保存の体制に関する諸問題」

（309号室）問題提起　福本智安氏（大阪商業大学）

司会者　桑尾光太郎氏（学習院大学）

討議終了後、再び一堂に会して全体総括をおこない、各分科会の司会者である池田裕子氏（関西学院）・馬場弘臣氏（東海大学）・桑尾光太郎氏（学習院大字）の3氏が討議内容を報告した。佐伯氏の全体記録と3氏の報告については以下に掲載してあるので、詳細は各論稿を参照されたい。

最終日の9月22日は、10時に石川近代文学館（金沢市広坂）に集合し、同館の展示を見学した。はじめに、喜田惣一郎理事長より石川近代文学館設立の経緯を伺い、続いて井口哲郎館長から収蔵史料と展示の概要をお聞きした後、展示を見学した。旧制第四高等学校本館という歴史的な建物を利用して、石川県ゆかりの作家をとりあげた特色ある展示であった。続いて訪れた金沢市立ふるさと偉人館

（金沢市下本多町）は、金沢を代表する木村栄・鈴木大拙・高峰譲吉・藤岡東圃・三宅雪嶺ら5人の関係史料を展示した博物館であり、中嶋伸一館長と中西邦夫調査員の説明の後、映像機器やグラフィックを多用したモダンな展示を見学した。そして、ふるさと偉人館見学後、石川県立歴史博物館（金沢市出羽町）を訪れた。同博物館見学に先立って西口忠氏（桃山学院）と谷本宗生氏（金沢大学）から全国研究部会閉会の挨拶があり、その後、同博物館学芸主任の本康宏史氏より近代史料展示の詳細な説明をうけ、研究会の全日程を終了した。

石川近代文学館の展示見学（9月20日）

最後に、会場設定等の面倒な仕事を応援してくださった金沢大学の江森一郎先生、谷本宗生氏をはじめとする皆様に、心から御礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

（松崎）

＊参 加 校＊

〈東日本部会〉22大学（29人）＋6個人会員＋顧問1人

学習院大学　神奈川大学　慶応義塾
国際基督教大学　実践女子大学　成蹊学園
専修大学　拓殖大学　玉川大学　中央大学
東海大学　東京女子大学　東京電機大学
東京農業大学　東北学院　東洋大学
法政大学　宮城学院　武蔵野美術大学
明治大学　立教大学　早稲田大学
竹市知弘　顧問
高橋英雄（東北大学百年史編纂室）
谷本宗生（金沢大学50年史編纂室）
永田英明（東北大学記念資料室）
中野　実（東京大学大学史史料室）
西山　伸（京都大学百年史編集史料室）
山口拓史（名古屋大学史資料室）

＜西日本部会＞14大学（24人）＋2個人会員

大阪音楽大学　大阪商業大学　大谷大学
関西大学　関西学院　甲南大学
神戸女学院　西南学院大学　同志社
梅花学園　福岡大学　桃山学院大学
立命館　龍谷大学
折田悦郎（九州大学大学史史料室）
原登久雄（前桃山学院大学学院年史委員会）

総計＝36大学（53人）＋8個人会員＋顧問1人＝62人

〈会場校〉

橋本哲哉氏（金沢大学附属図書館長・50年史編纂委員長）
江森一郎氏（金沢大学教育学部教授・50年史編纂委員）
梶井重明氏（金沢大学附属図書館専門員・50年史通史執筆者）
在田則子氏（金沢大学資料館学芸員）

第1分科会

「資料の調査・収集をめぐる諸問題」の報告

分科会開始に当たって、20名の参加者全員の簡単な自己紹介を行った。その結果、司会者も含め、15名の参加者の経験年数が1～2年であることがわかった。それに対して、問題提起を行う明治大学歴史編纂事務室の鈴木秀幸氏は、10年以上の経験を有するベテランで、豊富な経験と事前アンケートの分析に基づいた、中身の濃い発題を準備されていることが期待された。そこで、第1分科会では、多くの時間を鈴木氏のレジメに基づいた報告にあて、残りの時間を初心者から出た質問・疑問に、鈴木氏をはじめとする経験者に答え

てもらうという形で進めることにした。

鈴木氏の報告は、理論が机上の空論ではなく、実際に自分の「足」と「頭」を使って資料を収集し、年史を編纂してきた経験に裏打ちされていたため、ひじょうに具体的でわかりやすかった。おかげで、このようなテーマにどこから取り組んでいいのかすらわからない初心者側の緊張もほぐれ、具体的な質問（例えば、同じ大学で他の部署も同じ資料を持っている場合の調整とか、紙以外の資料の取り扱いについて等）が飛び出し、有意義な時間となった。そのような中で、今まで大学史の中で欠けていた「場」を重んじる編纂の重要性が指摘された。学生が勉強している様子や、使用していた実験器具、食堂で何を食べていたかということは、今までの大学史の中で忘れられがちであった。今後は、このような観点からの資料収集も重要視する必要があるだろう。

資料の調査・収集がなければ、その利用も保存も当然考えられない。その意味からも、第１分科会では、根本的な問題をテーマとしたことになる。初心者にとって、仕事を進める上での「核」ともなるべき内容であった。

どういう資料をどういう風に集めるか、私達は常に「頭」と「足」を鍛えておかなければならない、あそこに行けば何かあるだろうと教員・学生に思わせる、等々。このような鈴木氏の指摘は、日々の仕事をする上でも、大きな方向性を示すことになったと思う。

（池田）

第２分科会

「資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題」の報告

第２分科会は、事前に行われた大学史におけるコンピュータ利用の実態と諸問題に関するアンケートの集計結果に基づく福井智佳子氏（関西大学事業局出版部出版課）の基調報告をもとに、19の大学史関係者が参加して行われた。

福井氏の報告によれば、この問題に関しては、多くの大学が実施ないしは実施に向けての取り組みを進めており、その意識の高さが浮き彫りにされた。しかも導入のきっかけは、学内ＬＡＮの構築など外部的な要因よりも、業務の再構築をめざした自発的な取り組みが多く、そのメリットとして検索の容易さ、目録化作業の合理化、資料の一括管理が可能となるといった点があげられていた。ただし、関西大学の場合は、学内の情報システムの構築にともなって準備が進められているとされ、このように他の部署と同一歩調をとることで、共同作業や情報交換が可能となるとともに、資料室を認知させるといったメリットがあることを指摘された。

次に具体的なシステムの導入と運用、およびその問題点について報告がなされた。ここでは使用するソフトの種類を含めて、各大学において多様なシステムが導入されており、先の問題とあわせて、担当者の意識や力量に左右される部分が大きいこと、大学間において格差があることなどが指摘された。また、運用面に関しては、予算の問題よりも、管理・作業人員の確保や作業への具体的な取り組み方などが問題であるとされた。最後に、今後はデータベースのインターネットによる公開や情報公開の問題を含め、大学間におけるさらなる情報交換の必要性を提起された。

以上の報告をもとに、主に導入時における問題点を中心に意見が交わされたが、その前

提として、参加校のうち、すでに導入を実施している大学（８校）と、準備を進めている大学（８校）について、その現状と問題点を報告してもらった。その結果、改めて各大学ごとの多様性が明らかになるとともに、福井氏の論点に加えて、データの汎用性（互換性）確保の問題や、担当者間の受け継ぎおよびメンテナンスの問題、コンピュータ利用の習熟とアーキヴィストとしての専門性に関する問題などが広く論議された。さらに、目録の作成方法や分類・検索項目のあり方など、データベース化における情報処理の方法について、つっこんだ議論が必要との意見が出された。

総じていえば、大学史編纂におけるコンピュータ利用の重要性については等しく認識しているものの、実際の導入・運用においては試行錯誤が続いており、まだまだ議論が必要なこと。そのためにもコンピュータ利用の目的や有用性を明確にしつつ、これを資料の収集から整理・保存・利用・公開といった全過程のなかにどのように位置づけていくのか、総体的な議論を組み上げていくことが必要であることが確認された。　（馬場）

第３分科会

「組織的な資料保存の体制に関する諸問題」の報告

第３分科会では、資料室等に収集された大学史資料をどのように保存・継承していくか、その必要性や問題点が討議された。参加者は国立大学から５名、私立大学から19名であった。まず配付資料「大学（学園）史資料の収集・保存等、運営に関するアンケート回答集計」について、同アンケートをとりまとめた大阪商業大学の福本智安氏から報告が行われた。福本氏は、①資料の取捨選択（何を保存するのか）②資料の形態　③資料保存の場所、の３点を問題点として挙げ、以後アンケートの問８「収集した資料は、どのように取捨選択していますか」、問９「保存に関して、何らかの規程（内規）がありますか」、問11「大学（学園）資料室、または、それに該当するものがありますか」を中心に議論が進められた。

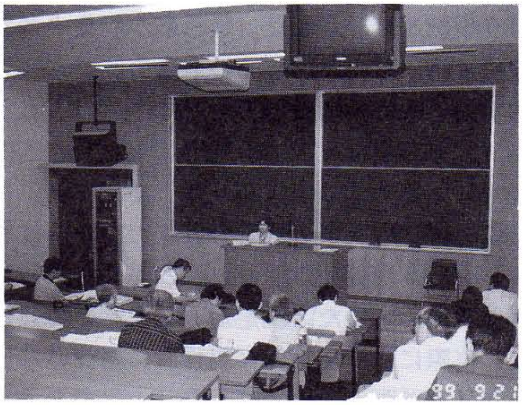
資料の取捨選択については、基本的に資料は取捨選択をせずにすべて受け入れるという意見が多かった。受け入れ後の資料の扱いについては、形態や内容に応じて資料にとって一番適した場所に再移管することもある、という事例が紹介された。資料室が収集すべき資料とは、どの範囲までのものかという根源的な問いもあった。沿革資料は当然のこととして、卒業生の蔵書や研究業績などをどう扱うかについては今後課題となるであろう。

資料保存に関する規定の有無については、アンケート回答では「ない」と答えた大学が75％を占めていた。規定がある大学の場合でも、実際には「文書保存規程」に基づいて資料が移管されるケースは少ないようである。資料室自身が収集や保存の規定を作成する必要はあるか、という点については、資料の受け入れ窓口を狭くするおそれがあり、必要ないのではないかという意見が出た。規定の有無よりもむしろ、学内で資料室の役割をアピールし、資料収集について常に働きかけを行うことの重要性が確認される形となった。

資料保存の組織については、資料室と図書館との関係が話題の中心となった。刊行物編纂時における「一過性」の部局が資料の収集や保存を臨時に担当している感があり、恒常的な資料保存組織としては、図書館が技術的

に適当ではないか。資料室と図書館は一体であるべきではないか、という意見が出た。これについては、資料室と図書館の機能は分けるべきである、アーカイヴの基本生命は「記録性」であり、図書館とはおのずから異なる、という反対意見があった。また、資料室と図書館では資料収集の面で重複することがある、小規模大学では博物館・アーカイヴ・図書館の並立は困難であるという意見もあった。美術資料や民俗資料といった「モノ資料」の管理についても発言があったが、時間のため充分な議論はできなかった。

今回の議論では、各大学間で、その大学の規模や国立か私立か、収蔵する資料の特色などによって、資料室の組織や機能に対する考え方がまちまちであることが浮き彫りとなった。これはある意味では当然のことで、それぞれの考え方を交換し見解の相違があればそれを明確にすることも、分科会の意義のひとつであろう。（桑尾）



分科会全体の記録

分科会での討論は1998年度の全国研究会で初めて試みられたものであった。前回も３つのテーマに分けて行なわれたが、そのうち第２分科会が討論にまで発展しえずに終了し、多くの課題を残した。そこで引き続いて議論を深めるため、第２分科会での課題の中から主題を選んで1999年度の分科会テーマとした。

昨年の第２分科会の司会者・中央大学大学史編纂課の松崎彰氏が分科会の発題を行なった。昨今、史料を重視し、日本近代史上での学校の位置づけを行なう年史の編纂をする学校がふえ、協議会のこれまでの活動も成果をあげているといえる。そこで今年度は「史資料」にこだわって分科会のテーマを決めた。昨年度の全国研究会終了後にとったアンケートを中心に以下の３つのテーマを設定した。第１分科会は資料の調査・収集をめぐる諸問題（問題提起・明治大学歴史編纂事務室の鈴木秀幸氏、司会・関西学院学院史資料室の池田裕子氏）。第２分科会は資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題（問題提起・関西大学事業局出版部出版課の福井智佳子氏、司会・東海大学資料室の馬場弘臣氏）。第３分科会は組織的な資料保存の体制に関する諸問題（問題提起・大阪商業大学谷岡記念館事務室の福本智安氏、司会・学習院大学学習院大学史料館の桑尾光太郎氏）。

分科会での話し合いのあと、全体報告を聞いた。

第１分科会は関西学院の池田氏の報告。ワーキンググループの責任者としてアンケート結果をまとめて下さった明治大学の鈴木氏のレポートがすばらしかったことを紹介し、これに沿って報告された。資料収集は史実の明確化のために、今何をなすべきかということをしっかりと踏まえてする必要がある。そして収集・運用には分業化が欠かせないが、資料の前では皆平等であるという意識をもたねばならない。今後は共同作業が必要となってくることから、情報交換・協力体制を構築すること、そして担当者は足と頭を鍛えなければならないと結ばれた。

第２分科会は東海大学の馬場氏の報告。関西大学の福井氏のアンケート結果報告を受けて、コンピュータ導入のきっかけ、他部署との協力体制（学内LANも含めて）等、各大学の取り組みと、問題点をそれぞれ実例をあげて討論した。

実施校も未実施校も情報交換のためにコンピュータ導入は必要であるとして問題意識は

高いが、現在の状況では学校間の格差拡大が懸念される。コンピュータ導入のための基本的な問題はコンピュータソフトが何であるかではなく、収集とデータベース化の目的の明確化、必要なデータの選別である。データベース化は必要であるが、運用するのはアーキヴィストである。今後はアーキヴィストとコンピュータとの関係を考えていかなければならない。

第３分科会は学習院大学の桑尾氏の報告。資料を受け入れると一口にいってもいろいろな問題がある。保存規定があっても規定どおりにいかないことが多いし、学内での認知度も各校の事情により異なるため、アーキヴィストの独自性が必要となってくる。文書以外の資料の受け入れの問題、情報公開の問題、機能面からは博物館との関係など今後検討していかなければならない課題が数多くある。

今回の分科会では、次に考えていかなければならない課題がある程度具体的に見えてきたように思われる。この成果を今後の活動に生かしていければと願っている。（佐伯）

1999年11月11日㈭　研究部会（見学会）

東京工業大学百年記念館を見る

実践女子大学記念事業事務室　城　田　秀　雄

第18回の研究部会は東京工業大学百年記念館２階第１会議室で行われた。冒頭、入戸野修教授（百年記念館主事）から百年記念館設立の経緯と概要についての説明があり、続いて道家達将氏（東京工業大学名誉教授）から「百年記念館の展示について」と題して動態機械の現状のほか、次のようなお話を伺った。

東京工業大学は、日本の科学技術教育と研究の発展を担ってきた。百年記念館は、大学の歴史的記念物および現在を示す資料を収集し展示して広く関係者へ提供すると共に、会議室を設けて研究者・卒業生・学生との研究交流の場を提供している。また、地下１階の展示室は一般公開されている。この室の機械・機器の展示品が、動く展示品という特徴を持っていることで動態展示と呼ばれている。ここには大学の代表的な研究の記念物と、学校の創立や改革に関係した人々の歴史的資料を展示し公開しているとのことであった。引き続いて小林満氏（東京工業大学技官）からは綿紡織機を中心とした動態機械の工程についての具体的な説明を受けた。綿塊から細長い“しの”状の製品を作り、練条・粗紡・精紡の各工程へのプロセスを機械図面によって解説し、展示品を見学する前の予備知識とした。

報告する道家達将先生

地下１階にある特別展示室には、創立時代の研究資料であるＧ・ワグネル、正木退蔵、谷口吉郎関係資料や、陶磁器資料（河井寛次郎、浜田庄司、板谷波山、島岡達三制作）、型染和紙（芹沢銈介制作）などが見られる。

展示品を目の前にして興味を惹かれたのは、大型の機械スターリング・エンジンと呼ばれるもので熱空気機関ともいう。アメリカのライダー・エリクソン・エンジン社製で大正15年（1926）に購入し、今日でも一部を修復して動かしている。ロンドンの科学博物館にも展示品はあるが、動く状態にあるのはこれ一台のみとのこと。熱い空気と冷たい空気をピストンでそれぞれの部屋に交互に送り込み、これによって起こる内圧の変化を別のピストンで動力として取り出すものである。そのほかに粗い糸を供給して糸を紡ぐ実験用の機械ミニチュア・リング精紡機（1965年製造　英国製）、巾の狭いテープ（帯締め様のもの）を織る高遠テープ力織機（1927年製造　スイス製）、国内で普及し海外にも輸出された豊和工業N型織機（昭和36年購入）などを見学した。

日頃の仕事で文書類の資料には慣れてはいたが、大型機械の歴史資料を目の当たりにして度肝を抜かれたと言うのが実感である。これも大学史資料であることと同時に、大学史大学史資料の範囲、資料選択、保存・利用方法など対応の容易でないことを認識させられた。

スターリング・エンジンの動態展示見学

全国大学史資料協議会
1999年度総会議事録（抄）

日　時　1999年9月20日(月)　15時～15時30分
会　場　金沢大学　角間キャンパス
　　教育学部棟　302号室
出席校　西日本部会　15大学（25人）
　　2個人会員
　　東日本部会　22大学（29人）
　　6個人会員
　　顧問1人
開会司会　　中央大学　　松崎　　彰氏
会長校挨拶　桃山学院　　西口　　忠氏
会場校挨拶　金沢大学　　橋本　哲也氏
　　（50年史編纂委員長・附属図書館長
　　経済学部教授）
議長の選出
　議　長　明治大学　　鈴木　秀幸氏
　副議長　福岡大学　　藤本　俊史氏
議　事　(1)全国大学史資料協議会
　　役員会報告（承認）
　　(2)1999年度部会事業計画報告
　　（報告事項）
　　(3)その他
講演会　講演者　江森一郎氏
　　（金沢大学教育学部教授・
　　50年史編纂委員）
　　演　題　「金沢大学50年史の編纂について」
懇親会　金沢大学生協食堂にて開催
　　出席者63名

全国大学史資料協議会
1999年度役員会議事録（抄）

日　時　1999年9月20日(月)
　　13時30分～14時30分
会　場　金沢大学　角間キャンパス
　　教育学部棟302号室
出席校　西日本部会幹事校
　　桃山学院　関西大学　同志社
　　福岡大学　立命館　龍谷大学
　　関西学院　神戸女学院
　　東日本部会幹事校

神奈川大学　東海大学　慶應義塾
中央大学　武蔵野美術大学
明治大学　学習院大学
実践女子大学　竹市　知弘氏（顧問）
中野　実氏
会場校　谷本　宗生氏（金沢大学）

議　事　(1)全国大学史資料協議会総会の運営について
(2)1999年度の東西両部会の共同事業について
(3)その他

全国大学史資料協議会 1999年度全国研究会記録（抄）

（第17回東日本部会研究部会）

日　時　1999年9月21日(火)～9月22日(水)
場　所　9月21日　金沢大学　角間キャンパス教育学部棟
9月22日　石川近代文学館
金沢市ふるさと偉人館
石川県立歴史博物館
参加校　西日本部会　15大学（25人）
2個人会員
東日本部会　22大学（29人）
6個人会員
顧問1人
総　計　37大学（54人）
8個人会員
顧問1人
会場校　金沢大学（4人）

1．報告　9月21日　金沢大学　角間キャンパス教育学部棟
梶井　重明氏
（金沢大学附属図書館専門員・50年史通史執筆者）
（演題）「金沢大学附属図書館所蔵貴重資料について」

2．見学　報告終了後、梶井重明氏・在田則子氏（金沢大学資料館学芸員）のご案内で金沢大学年史資料展示の紹介と説明を受け、同大学の附属図書館の諸施設を見学した。

3．分科会
発　題　松崎　彰氏（中央大学）
記録者　佐伯裕加恵氏（神戸女学院）
第1分科会「資料の調査・収集をめぐる諸問題」（307号室）
問題提起　鈴木　秀幸氏（明治大学）
司会者　池田　裕子氏（関西学院）
第2分科会「資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題」（308号室）
問題提起　福井　智佳子氏（関西大学）
司会者　馬場　弘臣氏（東海大学）
第3分科会「組織的な資料保存の体制に関する諸問題」（309号室）
問題提起　福本　智安氏（大阪商業大学）
司会者　桑尾　光太郎氏（学習院大学）
全体報告　各分科会司会者

4．見学会　9月22日
＊石川近代文学館
喜田惣一郎理事長より設立の経緯を、井口哲朗館長から収蔵資料と展示の概要を拝聴後、展示を見学した。
＊金沢市ふるさと偉人館
中嶋伸一館長並びに調査員中西邦夫氏の説明の後、映像機器やグラフィックを多用したモダンな展示を見学した。
＊石川県立歴史博物館
同博物館学芸主任の本康安史氏より近代史料展示の詳細な説明を受け、各自自由見学とし、全日程を終了した。

※講演、報告、分科会の内容につきましては、本号に掲載した諸報告をご参照ください。

全国大学史資料協議会東日本部会 幹事会議事録（抄）

第23回の東日本部会幹事会は全国大学史資料協議会1999年度役員会として開催された。

第24回　1999年11月11日(月)　14時～15時
会　場　東京工業大学　百年記念館
2階第1会議室
出席校　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
実践女子大学　東海大学　中央大学
武蔵野美術大学　明治大学

中野実氏
議　事　(1)1999年度の研究部会について
(2)1999年度の東西両部会の共同事業について
(3)その他
第25回　2000年1月20日(木)14時～15時
会　場　明治大学　リバティタワー
19階　第6会議室
出席校　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
実践女子大学　東海大学　中央大学
武蔵野美術大学　明治大学
中野実氏
議　事　(1)1999年度の研究部会について
(2)2000年度の部会運営について
(3)その他

全国大学史資料協議会東日本部会 研究部会記録（抄）

第18回　1999年11月11日(月)　14時～17時
会　場　東京工業大学　百年記念館
2階　第1会議室
参加校　16大学　2個人会員26名
挨　拶　入戸野　修氏
（百年記念館展示部門主事・東京工業大学工学部教授）
報　告　道家　達将氏
（東京工業大学名誉教授）
「百年記念館の展示について」
小林　　満氏
「動態展示について」
見　学　百年記念館地階特別展示室・同収蔵庫
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した城田秀雄氏の報告をご参照ください。
第19回　2000年1月20日(木)　15時～17時
会　場　明治大学　リバティタワー
19階　第6会議室
参加校　18大学　1個人会員　21名
講　師　鈴木　邦男氏
（大和市役所総務課市史編纂担当）
演　題　「情報公開制度をめぐって」

ミニ情報

▶愛知大学で『大学史資料展示案内』刊行

愛知大学は、1996年11月に創立50周年を迎え、これを記念して1998年5月に大学記念館大学史展示室を開設した。大学記念館は、1908年に旧陸軍第15師団司令部庁舎として建造され、愛知大学の創立から1996年まで大学の本館として使用されてきた建物である。愛知大学では、このたび記念館内に設置された大学史展示室の資料展示案内パンフレットを刊行、大学の研究教育上の業績の歩みを資料によって広く公開することとした。

▶『札幌学院大学50年史』発刊

1996年6月に創立50周年を迎えた札幌学院大学では、翌1997年に刊行した写真集『札幌学院大学50年』に続いて、本年3月に『札幌学院大学50年史』の通史編（B5判、488ページ）と資料編（B5判、396ページ）を刊行した。

（以上2点の紹介は、本会報編集担当者）

ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

慶應義塾大学・福澤研究センター
〒108-8501　港区三田2-15-45
☎　03-3453-0254
中央大学大学史編纂課
〒192-0393　東京都八王子市東中野742-1
☎　0426-74-2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎　045－481－5661
東海大学資料室
〒151-8677　渋谷区富ヶ谷2－28－4
☎　03－3467－2211
中野　　実（東京大学大学史史料室）
〒113-8654　文京区本郷7－3－1
☎　03－3812－2111